

山と博物館

第59巻 第1号 2014年1月25日

市立大町山岳博物館



ガンガプルナ (7,454m・平成 25年 11月 25日撮影)

豊穣の地

松原 繁

ネパール語で登り道は「ワカロ」、下り道は「オラロ」、平坦な道は「テルソー」。遙かネパールのアンナプルナに心を引かれたのは、一九五〇年にモリス・エルゾーク隊長率いるフランス隊が（いち）峰を北面から登攀し、登頂に成功（人類最初の八〇〇〇m峰の登頂）した著書『処女峰アンナプルナ』に出合ってからであった。

それから五十年が経った二〇一三年十一月六日、マルシャンディコーラを廻り、トロンフェデーのロッジに着いた今、アンナプルナ山群とガンガプルナの氷河とヒマラヤの高峰が目前にある。マナスル、ダウラギリ、アンナプルナの三つの八〇〇〇m峰を間近に仰ぐことが出来るのも楽しみの一つである。四十年前二十九歳の若さで「帰国したら田舎の山岳会でも遠征できる山を見つけてくる」とタウラギリV峰を目指しながら雪崩に消えた岳友の慰霊をすることも出来た。

山旅も七日過ぎ、あと一日頑張ればトロンパス（五四三mの峠）を越えることの出来る長いオラロを歩く。桃源郷のムクチナートはチベット仏教のゴンバと、ヒンズー教の寺院が並んでいると言ふ。七十歳を越えたら必ず行こうと心に決めていたことが現実となり、自然に目頭が熱くなる。これは何なんだろう？ 今まで生かされてきたことへの感謝と夢を持ち続けることの大切さを知った故（ゆえ）だろうか。人は争いがなければ知恵と経験とで生きて行けることが、この地に来て身をもつて感じた。ただテレビが映り、バイクが走り、携帯電話が普及しつつある現実には、貧富の差を生み、争いの種になるような気もするが、自給自足の心は失わずにあつてほしいと思ふ。

オンマニテメフム（南無阿弥陀仏）

（大町山の会員）

日本のヒマラヤ登山今昔

山森 欣一

ヒマラヤとは

雪の住処と呼ばれる世界がある。標高7000mを超える万年雪の山々は、寒冷と低圧の支配する世界であるが、その山麓にはラリグラス(石楠花)が咲き、コバニ(杓)がたわわに実る幽玄なる桃源郷でもある。

そこは北インドに昔から住む人たちによって、「ヒマラヤ」と呼ばれた。古代サンスクリット語で「ヒマール雪」、「アラール住居」であるという。

その場所はどこか。元々は、東のヤル・ツァンポー江大湾曲部タレート・ベンドから、西はインドス河まで(約2400km)、南は北インド平原から、北はチベット高原まで(約1600km)に広がっており、タレート・ヒマラヤと呼ばれた。次に南東から北西に走るカラコルム山脈も含まれるようになる。深田久弥はさらにヒンドゥー・クシュ山脈も広義のヒマラヤに含め、彼の「ヒマラヤの高峰」には、パミール、天山、崑崙、大雪山脈も包含するとした。何故なら中央アジアの高地を除けば、地球上に7000mを超える山は一つもない。

私が二十年前専従した日本ヒマラヤ協会(HAJ)は、「ヒマラヤ」地域だけを活動の対象とした団体である。1967年にHAJが発足した時その地域は、ネパール、インド、ブータン、パキスタン、アフガニスタン、中国ソ連の7カ国であった。それがソ連の崩壊によって、ソ連が消えカザフスタン、タジキスタン、キルギスが加え、現在は九カ国を活動の対象地域、ヒマラヤと捉えている。この地域にしか7000m峰は存在しな

いからである。

7000m峰と8000m峰が存在するヒマラヤを、大雑把に理解するには、英字の「L」を思い浮かべると分かり易い。南北では、Lの頭に当たる最北に位置する7000m峰は天山山脈のボベータ(中国ではトムール)で北緯約42度、北海道の駒ヶ岳(函館付近と同緯度)である。縦線の下端にはヒマラヤ山脈のインド、ナン

ダ・デヴィ北緯30度、屋久島の宮之浦岳付近のLの字の横線の間地点で南に位置するものが、世界最高峰エヴェレストで北緯約28度、奄美諸島・徳島の井之川岳付近に該当する。東西は、東経約102度横断山脈のミニ

30度、屋久島の宮之浦岳付近のLの字の横線の間地点で南に位置するものが、世界最高峰エヴェレストで北緯約28度、奄美諸島・徳島の井之川岳付近に該当する。東西は、東経約102度横断山脈のミニ



図1: 主な7,000m峰所在位置図

ヤ・コンカから約87度のエヴェレストを経て、約七十二度のヒンドゥー・クシュ山脈、ティリチ・ミールまで、直線約2800kmに及ぶ「雪の住処」の大動脈を形づくっている。(図1)

死せる大島亮吉は、生きる今西錦司を走らせたか

戦後、日本で初めてヒマラヤ登山の許可を取得したのは「マナスル」ではなく、意外にも1951年暮れにインドから福岡山の会に来たが、出発直前に取り消しになった。

1952年、京都大学がネパールから「マナスル」の登山許可を取得した。しかし今西錦司は部内にある強硬な反対論を押し切り登山許可を日本山岳会に委譲した。表向きにはネパール側は①ナショナルチームを希望している。②学術探検よりも登山だけを歓迎しているなどであった。そして1956年5月9日マナスルは日本人によって初登頂された。

ところが、1993年になり慶應大学の大島亮吉(1928年3月前穂高岳北尾根で滑落死亡)が今西錦司に送った私信のあることを近藤信行が、岩波書店の「図書 六月号」でその一部を公表し明らかにした。近藤からこの私信を見せられた田口二郎は、著書「東西登山史」(岩波書店、1995)で以下のように推測する。「今西が、激しい反対にもかかわらず日本山岳会への移譲をゆずらなかったわけが、私にはわかつたような気がした。それは大島の古文書の一つに「大きなことを考えている。学校やグループなど、どうでもいいことだ。」という文意が綴られていたからである。おそらく今西の頭には、二十代の青年期に大島と交わした書簡の一句一句が深く刻まれていたのだと思う。」と書き、大島の書簡を目にして私は、未完の歴史とはこれかとつぶやいたものだ。「死せる大島、生ける今西を走らす」と思ったのも運命の巡り合わせをふと感じたからだ。一と結んだ。

外貨の壁

1953年のマナスル第一次隊は、7、

750mに到達した。隊員は加藤喜一郎、山田二郎の慶應大学と石坂昭二郎の日本大学であった。そして1956年の初登頂の栄冠は京大の今西寿雄。田口だけでは全く全ての関係者が、運命のめぐり合わせを感じたのではなからうか。マナスルを委譲した京大に鬱憤が溜まっていた。1953年秋、京大は今西寿雄を隊長にアンナプルナIIに登山隊を派遣。登頂には失敗したがこれ以降各大学は、ネパール、パキスタンへと登山隊を派遣し、1965年までに京大はチヨゴリザ北東峰、ノシヤック、サルトロ・カンリ、アンナプルナ南峰に初登頂。ヒマラルン(北大)、ゴジエンバ・カン(且明大)と次々に成果を上げた。

この時代の日本のヒマラヤ登山最大の障壁は「外貨」であった。1958年の外貨のスポーツ枠は十八万ドル、オリンピック、世界選手権が優先された。登山に使用できるのはスポーツ、学術、一般しかないが、スポーツで登山に回るのは極一部一万ドルであり、その審議を日本山岳会が握っていた。日本の社会の仕組みから大学系へ流れるのは自明のことであった。これを打ち破ったのが一九五九年の福岡大学の登山計画であった。それを契機にスポーツ外貨が社会人登山愛好者で組織する日本岳連にも割り当てられることになった。こうして社会人登山隊によってレンポ・ガン、ギャチュン・カントルケ・カンが初登頂されたのである。

ネパール・ヒマラヤの開鎖と再解禁、カラコルムのオープン

ヒマラヤ登山は国境近くで行われる。平和でなければ登山隊に許可は下りない。インド／パキスタン、ネパール／中国、インド／中国、パキスタン／中国など国境を接する国の動静は重要だ。登山者は何時も国際政治に関心を持たざるを得ない。

1964年、ネパールは突然ヒマラヤ登山を禁止した。東京オリンピックを機に外貨が制

限付きながら一般に開放された。さあ、これから私たちも憧れのネパール登山へと意気込んでいた日本の登山愛好者たちは呆然とした。しかし、登山者たちの立ち直りも速かった。行き先は三つに分かれた。岩壁登攀を目指す人はヨーロッパ・アルプスへ。マスコミによって三大北壁狂想曲が演出された。高峰登山を目指す人たちは、アラスカ、アンデスとヒンドゥー・クシユがあつた。キスリングを担いでヒンドゥー・クシユに向つた登山者たちこそ幸せだったかもしれない。ネパールやカラコルムに比べるとやや小振りながら、憧れていた「ヒマラヤ」の高峰が面白いように登れた。

残念なことが一つだけある。ヒンドゥー・クシユ登山の中には、今でいうアルパイン・スタイルに近いシンプルな登山もあつた。ところが再びネパールが解禁されると、この方法が忘れられマナスル以来の重々量登山が主流となつてしまつたのである。

1970年、ネパールはヒマラヤを再解禁した。世界中の登山者が殺到した。日本勢も負けてはいなかった。マカルー南東稜、マナスル西稜、ジャヌー北壁を初登攀。P二十九、ダウラギリIV、ランタン・リルンを初登頂した。

1974年、カラコルムもオープンした。国際政治が安定に向かつた証左でもある。未踏峰が面白いように登れた。資金力のある大学隊は奥地をめざした。テラム・カンリ、アブサラス、シンキ・カンリ、スキヤン・カンリを初登頂。社会人山岳会隊はアプローチは短いが困難な南面に取り付いた。そのため失敗も多かったが、カンピレ・デオール、K12、バトゥラIV、プマリ・チツシユの初登に成功。

ヘビーウェイト(重々量)からライトウェイト(軽重量)へ

1970年代に日本の経済が高度成長を続けると、社会の中に「個人」を主張し始める若者たちが増加し、1985年には会社の中でも「新人類」と位置づけられた。山の世界にも二

三年後に浸透し始めた。束縛を嫌い気の合った者同士が、気軽に手軽に登山を追求したり楽しむための「同人」が流行り、結局、社会人山岳会も学校山岳部も長期凋落の一途を辿ることになった。しかし多くの同人は結局社会人山岳会の域を越えることはできず、歴史が浅いだけに消えていくのに時間はかからなかつた。あとに残つたのは、集団の中で維持されてきた「リーダーシップ、メンバーシップ」の育成の場の欠落であつた。

だが、悪いことばかりではなかつた。1980年代に入り急速に社会の中に浸透した「個人意識」は、登山の本質に返ろう、シンプル登山を追求したいという一群の登山者を生み出した。これらの登山は、より困難な条件を課し、「岩登り」「フリー化、高所登山」「アルパイン・スタイル、8000m峰」「冬季登山、最終キャンプが8000m前後に設けられる峰」「無酸素登山」をめ



写真1:マカルー(8,463m) 1970年日本山岳会東海支部隊が初登攀した南東稜(右)

ざした。これらを実践するためには、マナスル以来踏襲してきた「シェルパ雇用、固定ロープ使用、酸素使用」を極力避け、登山者自身の身体鍛錬をベースにした登山の実現が求められた。

ここに二人の改革者が現れた。原真(1936-2009)と小西政継(1938-1996)である。共に現役の登山家として活躍していた。

原は、1970年マカルー南東稜初登攀を指揮し、その報告書は後に続く登山者のバイブルとなった写真集。しかしそれを良しとせず、1976年バミールで短期速攻の実験登山を開始、以後低圧室での訓練にアンデス、アラスカ、ヒマラヤでの実験を繰り返し、フランスのリポリエ博士の理論を修正し、8000m

峰のダウラギリI(1981年)、シシャバンマ(1982年)でアルパイン・スタイルを確立した。「高山研究所「登山のルネサンス」山と溪谷社(1982)」

小西は、1976年ジャヌー北壁初登攀を大量登頂で成功させたが、それは、世界の登攀界では評価されないとし、8500m級の無酸素登山をめざした。1980年カンチエンジュンガ北壁、1982年K2(チョゴリ)北壁を無酸素で初登攀に導いた。仕上げは1983年エヴェレスト南東稜から二名を無酸素で登頂させることに成功した。これは日本人による世界最高峰初の無酸素登山の成功である。同時に成功した他隊の3名のうち二名が墜死した事実からもエヴェレストの無酸素登山の困難さが分かる。

1985年には、ニューヨークのプラザホテルの会議で、「円高が容認され(アラザ合意)」、かつての日本では「三生に一度」とされたヒマラヤ登山が、年に二度も三度も実践できる環境となつた。この時代を代表するのが、世界最強の登山家との異名を持つ山田昇であつた。

ちなみに、日本人の8000m峰登山者の数を見ると、キーワードとして「二十」を上げることができる。すなわち、1956年マナスル登頂からほぼ二十年間(1976年)の延べ登頂者数が二十名。1977年〜1979年の三年間で二十名。1981年一年間で二十名である。

中高年登山者の急増と高所遠足時代の到来

日本人の平均余命は1970年頃から急速に伸びた。その影響はヒマラヤ登山界にも現れ始めた。1956年マナスル初登頂した今西寿雄は四十一歳であつた。これはチョー・オユール初登頂者のヘルベルト・ティッヒの四十二歳に次ぐ高齢者記録であり、今西の体力・気力がいかに優れていたかを物語るものである。

一般的に中高年とは四十歳以上を指すが、7000m峰以上の登頂者に限ってみれば、次に四十歳の太田欽也が700m低いテラム・カ

ンリに登頂したのは約二十年後の1975年であつた。その七十年代の中高年登頂者は6名であつた。それが八十年代に入ると田部井淳子(四十一歳を皮切りに、1987年までの八年間に延べ三十二名に達した。社会全体の高齢化に1985年のアラザ合意が拍車をかけ、日本のヒマラヤ登山者が増加、その中高年者が増えたのである。

8000m峰十四座の中で最後まで残つたのはシシャバンマであつた。中国領であることから初登頂は1964年であつた。人類初の8000m峰アンナプルナー初登頂から十五年経つていた。

この間を「ヒマラヤ・オリンピックかいは、ヒマラヤ黄金時代」と呼ぶ人もいる。

シシャバンマを除く十三座のうち最後まで残つたのが、ダウラギリIであつた。その初登頂は1960年のスイス隊である。初登頂者のうちクルト・ディムヘルカーは未だ健在である。彼は1957年にヘルマン・ブルラとブロード・ピークに初登頂しており、ブルと共に8000m峰二座初登頂の記録保持者でもある。ちなみに、初登頂ではないが、8000m峰二座に世界で初めて登つたのは、今西寿雄とマナスルに初登頂したギヤルツェン・ノルプである。(前年にフランス隊でマカルーに登頂した。しかし彼は、日本初のヒマラヤ登山遭難となつた1963年の大阪市立大学隊に参加し、爆風による雪崩のため遭難死亡した。

スイス隊の隊長であるマックス・アイゼリンは、初登頂二十周年を記念して1980年に雇客を一般募集してダウラギリI登山を実施した。これがヒマラヤ商業登山の嚆矢とされる。その形態はすぐにドイツに飛び火し、対象もアンナプルナ、マナスルからカラコルムへと広がり、チベットへの憧れもありチョー・オユール&シシャバンマを経て、最後は世界最高峰エヴェレストに集中することになった。1986年のことであつた。

私は、「岳人」6333号(2000年三月号)で、私たちの登山と同じようにヒマラヤの高峰

日本隊のヒマラヤ登山と死亡事故調査 (6,000m以上の峰を目指した隊を対象とした。1952-2004年=53年間)

表1 2005年1月3日現在

目標高度	1952-1969 (18年間)		1970-1979 (10年間)		1980-1989 (10年間)		1990-1999 (10年間)		2000-2004 (5年間)		合計 (53年間)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
8,000m峰	10	84	30	456	106	1,101	169	1,068	99	445	414	3,15
	0	0	9	18	21	31	13	18	4	7	47	74
7,000m峰	49	326	147	1,309	215	1,552	202	1,237	66	265	679	4,689
	4	5	19	30	38	45	15	30	5	5	71	115
6,000m峰	44	241	134	908	291	1,830	176	1,195	136	667	781	4,841
	3	3	12	20	17	31	7	23	3	3	42	80
合計	103	651	311	2,673	612	4,483	547	3,500	301	1,377	1,874	12,684
	7	8	40	68	66	107	35	71	12	15	160	269

上段：入山者、下段：死亡者。左欄：隊数、右欄：人数。% = 入山者に対する死亡率

日本隊のヒマラヤ登山入山者の内訳 (1952年-2004年=53年間) 2005年1月4日 山森欣一調べ

表2

2-1 年代別入山者

年代	人数	%
1950年代	126人	1.0
1960年代	525人	4.1
1970年代	2,673人	21.1
1980年代	4,483人	35.4
1990年代	3,500人	27.6
2000年代	1,377人	10.9
合計	12,684人	

2-2 地域別入山者

国名	人数	%
ネパール	4,539人	35.8
パキスタン	2,629人	20.7
インド	2,071人	16.3
旧ソビエト	487人	3.8
中国	2,866人	22.6
ブータン	92人	0.7
合計	12,684人	

2-3 目標山岳高度別入山者

高度	年別内訳					
	人数	%	50	60	70	80
8,000m峰	3,154人	24.9	36	48	456	1,101
7,000m峰	4,689人	37.0	62	264	1,309	1,552
6,000m峰	4,841人	38.2	28	213	908	1,830
合計	12,684人		126	525	2,673	4,483

日本隊のヒマラヤ登山と死亡事故 (1952年-2004年=53年間) 2005年1月4日 山森欣一調べ

表3

3-1 原因別死亡者

原因	人数	%
雪崩	128人	47.6
転落	82人	30.5
高山病	23人	8.6
行方不明	18人	6.7
その他	18人	6.7
合計	269人	

その他の内訳
疲労死=8、落石=7、風=2、雷=1

3-2 地域別死亡者

国名	人数	%
ネパール	108人	40.1
パキスタン	72人	26.8
インド	38人	14.1
旧ソ連	2人	0.7
中国	49人	18.2
ブータン	0	0.0
合計	269人	

「ヒマラヤ登山では「高きが故に困難である。」は真実である。生き残るには「歴史に学ぶ」ことが欠かせない。他人の記録を読み込めばヒントは隠されており、生き残る鍵は見えてくる筈だ。田口二郎は「東西登山史考」の中で、「遭難は、山の力が大きすぎたことよりも、自分の力に見合うリスクの認識の正確さで起きる。」という。至言である。情報を持って学べば自分に見合うターゲットは直ぐに見つけられる。「金か、家族か、職場か」というのは言い訳に過ぎず、それはまた、その程度の山好きで終わってしまうだろう。汗をかかなければ情熱を理解してもらえないし、夢を越えることはできない。それが青春というものだ。

次代を担うクライマーには、アルパイン・クラ イミングで結果を残せたことに満足することなく、 次のことにも目を向けたい。①是非「登山の素晴らしさ、楽しさ」を一般社会、せめて自分の故郷でアピールする担い手になって欲しい。②「評価機能」の担い手になって欲しい。これまでの日本の登山界が低調だった要因の一つが登山者自身による評価機能の欠落であったと思うからだ。次代を担うクライマーたちには、「登山は所詮遊びだ」とか「その日暮しの楽しみ」と囁くことなく、コンベ感覚ではなく、「タオ(道)」を基本として欲しい。登攀の結果を残すことだけなら、「重量」から「軽重量」へと手段が変わったにすぎず、従来と本質は変わらない。課題を見つけて(その内の一に)7,000、8,000mがある。全てを解決できなくとも挑戦し続けること。そのためには、山田昇、山野井泰史、竹内洋岳のように、「一人当たりが良く、誰とでも仲良く、友人が多い。」こともまた必要なことである。

ヒマラヤ登山は、二十世紀に花開いた文化である。人類が永久に生命を引き継いでいく限り、一度花開いた文化は後世必ず顧みられる筈である。そのためにも皆で今の時代の「ヒマラヤ登山」を記憶としてではなく、記録として残しておく。それが登山者の登山から学んだ多くの事柄への恩返しである。(日本ヒマラヤ協会会長)

「1990年代」と推移している。1.685%は登山者の努力によって死亡率が低下したのではなく、高所遠足の定着が示す数字なのである。こうして、ヒマラヤ登山の世界は、「1980年 年頭に広島三郎が予測した「二極分化の時代」、言い換えれば「6,000m峰のトレッキング時代」、可ピークへの集中」と、「8,000m峰高所遠足の定着」として、いみじくも実現したのである。私が日本のヒマラヤ登山遭難の実態を集計分析し発表したのは1980年であった。(表1・2・3)そのときの標高6,000m峰以上の死亡率は二・五%、四十名に一人が遭難死亡していた。また、1968年以降毎年死亡遭難が続き、その防止のために「事故防止(1990年からは環境対策も)研修会を開催していた。確定はしていないが、情報によれば昨年(2012年)は連続していた死亡遭難事故がゼロ(四十七年間でス

山と博物館 第59巻 第1号
 発行 2014年1月25日発行
 〒388-0002 長野県大町市大町八〇五六一
 市立大町山岳博物館
 TEL 026-211-1101
 FAX 026-211-1111
 E-mail:smn@city.omachi.nagano.jp
 URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpaku/

印刷 株 奥村印刷
 定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
 郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七一一三三九三

トップした。)となったことである。なぜ確定と出来ないかというと、2005年4月1日に施行された「個人情報保護法」を盾に、主に旅行業界がトレッキング、5、6,000m峰登山の顧客の情報を「家族の意向」として、その提供を拒否することが多いからである。この個人情報保護法の施行が、正確な資料を基礎とする私の記録整理を2004年で終えざるを得なかった所以でもある。

一方、山野井泰史の孤軍奮闘の中、1990年代初期から、ネパール、インドの6,000m峰でアルパイン・スタイルを実践していた馬目弘仁ら若手が徐々に数を増し、山野井ら少数によって維持されてきたアルパイン・クラ イミング先鋭派の後継者として台頭し、国際的なビオドール賞の受賞が続いている。しかし、ヒマラヤ登山の現実 は厳しい。1980年代にアルピニズムの本流を 実践していた藤倉和美、柳澤幸弘、加藤保男、吉野寛、禿博信、角田不二、石橋真、斎藤安平、山田昇、長谷川恒男らが相次いで 高峰で遭難死亡している。

「21世紀新しい潮流」日本のヒマラヤ登山界に高所遠足が定着したことを現す数字がある。「1.685%」である。8,000m峰登山者の死亡率が、4.176%(1970年代)、2.975%(1980年代)、1.685%(1980年代)、1.980年代、1.685% (1990年代)と推移している。1.685%は登山者の努力によって死亡率が低下したのではなく、高所遠足の定着が示す数字なのである。こうして、ヒマラヤ登山の世界は、「1980年 年頭に広島三郎が予測した「二極分化の時代」、言い換えれば「6,000m峰のトレッキング時代」、可ピークへの集中」と、「8,000m峰高所遠足の定着」として、いみじくも実現したのである。私が日本のヒマラヤ登山遭難の実態を集計分析し発表したのは1980年であった。(表1・2・3)そのときの標高6,000m峰以上の死亡率は二・五%、四十名に一人が遭難死亡していた。また、1968年以降毎年死亡遭難が続き、その防止のために「事故防止(1990年からは環境対策も)研修会を開催していた。確定はしていないが、情報によれば昨年(2012年)は連続していた死亡遭難事故がゼロ(四十七年間でス